

## 〈超越論的〉対象の二義性と「批判」：「超越論的」と「ア・プリオリな総合」

村田, 貴信  
山口東京理科大学 : 講師

<https://doi.org/10.15017/1430859>

---

出版情報 : 哲学論文集. 35, pp.23-38, 1999-09-25. 九州大学哲学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 〈超越論的〉対象の二義性と「批判」

——「超越論的」と「ア・プリアリオリな総合」——

村田 貴 信

—

〈超越論的〉対象は、『純粹理性の批判』（第一版＝一七八一年、第二版＝一七八七年）におけるカントの理論構成のうちに枢要な座を占める概念である。しかし、この概念の内包は、なるほど、二義をもつ。それは、以下のように概括されうる。

① 〈超越論的〉対象は、現象と物そのものとの「批判」的区別になる「外」として「未知」（A46＝B64）であり、また同時に感性の触発者でもあるかぎりにおいて、主観から、いわばもつとも遠くにある対象である。—— 〈超越論的〉対象の「感性の相関者」としての側面。

② 〈超越論的〉対象は、主観の根幹をなす超越論的統覚の「相関者」（A250）である。—— 〈超越論的〉対象の「悟性の相関者」としての側面。

こうした二義をとらえて、カントによる「超越論的」対象「概念の定義の不適切を難じてみたり、二義のうちのどちらが真正の内包をなすのかと質してみたりすることは、カントの真意を汲み取る道を閉ざしてしまう。

それというのも、「超越論的」対象「概念の『批判』における初出箇所」で、カントは、この概念を、表象の、表象とは区別される対象への関係可能性への問いにおいて問われている当の対象である、と規定しているからである。これは、そうした問いへの解答が果たされねばならないし、また果たされうる（むしろ、果たされえた）という立場から見ると、〈超越論的〉対象は、①であり、かつまた同時に②である、と言うに等しい。

ただし、この「同時」ということのうちには、『批判』中最大の労苦を要した(AXVII)「演繹」の試みが横たわっている。〈超越論的〉対象が①の側面をもつがゆえに、純粹悟性概念の客観的妥当性の権利根拠を闡明する「超越論的」演繹があえて解明を要する問いとして立てられたのであるし、十全な根拠をもってその解明に成功しえたという確信(AXII)あるがゆえに、〈超越論的〉対象のもう一つの側面として②が主張されえたのである。

ところで、②が主張された時点で①は捨てられたのであろうか？ もしそうであるなら、②は盤根錯節からのたんなる逃避になる解答であるにすぎない。①あるがゆえに、「荊棘」の道(BXIIII)でありながらも、問いが問いでありえたにもかかわらず、問いの問いとしての成立基盤をそれは掘り崩している。それはもはや「超越論的」問題設定への解答ではない。「超越論的」問題設定への解答とは、こうした困難を突破する道を歩むことであり、これのみが、残された「唯一の道」(AXII)である。

演繹が「超越論的」演繹であるかぎりには、①が保持されつつ②が言われなければならない。〈超越論的〉対象は①でありかつ同時に②であらねばならないし、そうであるかぎりにおいてのみ、演繹は「超越論的」演繹として果たされうる。演繹が「超越論的」なものとして追究され遂行されうることと〈超越論的〉対象の二義が統括的に把握されねばならないことは相即不離である。

以上、本稿の基本的視角を述べた。以下、下記二点の解明を中心として、「超越論的」対象」概念の二義の統括的な把握を試みる。

(一)「超越論的」対象」概念は、認識「批判」を基盤として立てられた、表象の、表象とは区別される対象への関係可能性についての「超越論的」な問いにたいして、ア・プリアリな総合判断の可能性の「演繹」によって解答を与えるという、一つの問題設定と問題解決とのつながりのうちに問われている当の対象である。すなわちまた、いわゆる「超越論的」対象」概念の二義性(①「感性の相関者」としての側面と②「悟性の相関者」としての側面)は、「批判」を基盤とする、そうした一つの問いの設定の方法(「超越論的」の反映①の側面)であると同時にその問いへの解答の方法(ア・プリアリな総合)の反映(②の側面)である。

(二)超越論的真理によって主張されているのは、真理についての対応説から真理についての整合説への移行ではなく、両説の統合である。〈超越論的〉対象の議論は、対応説から整合説への転換<sup>7)</sup>ではなく、両説が一つの〈超越論的〉対象の二義性と照応する文脈をなすことをつうじて、両説の統合を表現するものである。

## 二

「超越論的」という概念は、「超越論的」対象」概念とその出来の場を同じくしている。あらかじめ獲得済みの「超越論的」という概念を「対象」への形容として付すことによつてはじめて「超越論的对象」なる概念が得られたのではない。むしろ、「超越論的」という概念は、「超越論的」対象」概念をそれとして確定する過程において彫琢されつつ、その内包を整えた概念である。すなわち、表象と対象との関係可能性を問うことにおいて、いかような境地においてそれを問うかという、この問いの方法の彫琢過程のなかで得られ、そうであるがゆえに、この問いの方法を特徴づけることを自己の使命の本質と

して担わされているもの、それが、「超越論的」、である。しかも、ここで問われている対象は〈超越論的〉対象であるがゆえに、ほかならぬ、〈超越論的〉対象を巡る問題こそが、「超越論的」ということの意味と意義とを闡明する作業の核心をなすし、逆もまたしかりである。

ところで、そうした作業を進めるうえで、『批判』「超越論的感性論のための一般的注解」は、際立つ重みをもち、もつとも適切な教示を与えてくれる。カントは、そこで、「超越論的」という概念の形成史を、表象の、対象への関係可能性への問いを基軸に遂行された思索過程として叙述している。それは、〈超越論的〉対象への問いを、問いとして、しかも「超越論的」な問いとして確立し、そこで問われているものが、他のなものでもなく、〈超越論的〉対象であることを確定する過程である。「超越論的」は、本来的に、〈超越論的〉対象への問いの方法を特徴づけるものとして彫琢された概念である。

『批判』では「総合」的に叙述した<sup>(4)</sup>と言いながらも、『批判』の屋台骨をなす根本術語について、カントは、「分析的」その創出の事情を説明している。「批判」——「超越論的」(〈超越論的〉対象)——「ア・プリオリな総合」は、術語の形成史そのものが『批判』本文中で説明されている代表的な例である。これらの術語は、その創出の歴史性を本質的に自己のうちに刻みこんでいる。これらは、いわば相関概念をなし、暗黙にか明示的にか、一括的な視点において、他の立場との対比の歴史的推移に即して特徴づけがなされている。それは、カントの研究史の推移そのものである。

「超越論的」と「批判」とは、前者は、問題設定を特徴づける「方法」として、後者は、そうした問題設定を可能にするとともに、さらに同時に問題解決をも可能にする「方法」(「ア・プリオリな総合」として相関している。『批判』が「方法」についての論考(BXXII)であると言われる所以である。

「批判」——「超越論的」(〈超越論的〉対象)——「ア・プリオリな総合」という相関概念の創出の出発点に遡源すれば、そこには、「真理とは何か」という「古くからの有名な問い」が存している(A57 = B82)。「認識の対象との一致」(A58 = B82)というときのその「一致」とはいったい何を意味するのか?——これを問うことがすべての始まりである。『批判』が存在の

問題と認識の問題との交差する場面で展開されるのも、それが、認識と存在とのかわりあいにほかならない、真理への問いという出発点に根本的に特徴づけられているからである。そうしたかわりあいがいかにして可能なかが、カントの初動の根本的な問いである。

真理とは何かという、この問いがまさに問われるべきものであるということの再確認は、懐疑論との接触を契機としている。「認識と対象との一致」という、その「一致」とはそもそも何であるのか、ということが、そこであらためて問われる。これは、独断論の呪縛から脱するのみにとどまらず、カントが彼独自の哲学の形成に歩みを始めるうえで、決定的かつ根本的な問いであった。

こうした事情は、この場の論述としては、「感性と知性」との区別における「論理的」区別との対比(A44 = B61)によって、また、「現象」の「認識」と「対象そのもの」の「認識」との区別における「経験的」区別との対比(A45 = B62)によって、自己のそれぞれの区別の方法を「超越論的」と特徴づけること(A44 = B62, A45 = B62)のうちに現われている。

それによれば、「超越論的」とは、まさに「認識と対象との一致」の可能性を問うものであり、同時にしかし、そこで、そうした「内容」(A44 = B62)が問われているだけでなく、「起源」(A44 = B62)もまた問われていることからして(「批判」)、表象が、対象の側から由来しているのか、あるいは、主観の側に発するのか、という問題がそこには含まれている。そして、もちろん、問題がそうした形で問われるからには、対象の側からではなく、主観の側からの対象への接近(「ア・プリオリな総合」)が主として目論まれている。

そうした二段構えの区別をつうじて可能になったこの問いにおいては、「経験的客観」(A46 = B63)が、一般に、「対象自体そのものを示すかどうか」(A46 = B63)が問われる。そして、「表象と対象との関連につうじてこの問」(A46 = B63)が、「超越論的」(A46 = B63)と呼ばれ、この問いにおいて問われてくる「当の対象が、〈超越論的〉客観」(A46 = B63)と呼ばれる。しかも、この客観は、「われわれにはあくまで未知にとどまる」(A46 = B63)とされている。

カントがここで言っているのは、主観と対象との関係が可能であるとして、その関係が対象の側から可能になるとしたなら、それはア・ポステリオリなものであり、逆に、主観の側からその関係が可能になるとしたなら、それはア・プリオリなものである、ということである。そして、そのうえで、では、そうした主観の側からの、すなわち、ア・プリオリな、対象への関係が、いかにして可能であるか、と問うている。しかも、そこで問われているかぎりにおいて、問われている対象は〈超越論的〉客観であり、すでに「われわれには未知にとどまる」ことも、ある意味で前提したうえで、なお、ことさらにカントは問うている。

### 三

コペルニクスの転回という「思考法の変革」意図だけは、こうして十全な形で表わしえた。しかも、ここでは、「感性」の「批判」は遂行され終えていることが前提され、主として「知性」がさらになお「批判」さるべきものとして自覚されている。「知性」は、いずれ、「理性」と「悟性」とに「批判的」に区別され、それぞれの〈超越論的〉客観への関係可能性が吟味される。

ここで重要なことは、知性の能力をどのように見定めるか、ということが、〈超越論的〉対象への問いの確立と同時であり、あるいはむしろ、それへの解答の模索のなかで見定められえた、ということである。

カントは、こうした問いの境地を「人間的理性」をして独断論と懐疑論という「二つの断崖」(B128)を通り抜けせしめるものと説明している。「感性と知性」との「論理的」区別に対する「超越論的」区別は、すでに『可感界と可想界との形式と原理』(一七七〇年)でも展開されている。したがって、認識についての「経験的」区別との対決は、このあとのことに属する。しかも、ここで断崖を形成する懐疑論として、ヒュームが名指されていることからすれば、理性を「錯覚」(B128)と見なす、

ヒュームの理性把握との対決が決定的な転機となっている。<sup>10)</sup>

こうした覚醒を主導した問いは、〈超越論的〉対象への表象の関係可能性への問いである。そしてやがて、この問いは、「ア・プリアリな総合判断はいかにして可能であるか？」(B19)と定式化される。

この定式化においては、認識と客観との関係可能性への問いが認識主観の判断構成の分析において処理されることが表明されている。判断は認識能力によって遂行されるがゆえに、認識能力の分析がなされ、認識の起源、範囲、限界が最も重要なことごととして精査される(「批判」)。

「表象とその対象との連関」への問いが「超越論的」であるということは、ア・プリアリな総合判断の可能性への問いがたんにその「いかに」についての問いであるだけではなく、そもそもそうした判断が「可能であるか否か」の問いを含んでいることを意味している。つまり、ア・プリアリな総合判断の可能性の問いは、たんに確立済みの認識についてその「いかに」を問うということではなく、形而上学的認識の「可能であるか否か」を同時に問うている。

ここには、「超越論的分析論」にたいして、「超越論的感性論」が叙述において先行しなければならなかった所以もよく現われている。同一の物について、その物の現象とその物そのものを区別することは、時間・空間の超越論的に観念的にして経験的に実在的という教説に基づいている。しかも、この区別がないと、「超越論的」問題設定は鮮明にならないからである。これは、「可感界と可想界との形式と原理」が「批判」に先行しなければならなかった事情と平行的である。

『可感界と可想界との形式と原理』における感性と知性との「批判的」区別を前提として立てられた、いわゆる「沈黙の十年」における「超越論的」対象への問いが、『批判』において、ア・プリアリな総合判断の可能性への問いとして解答を試みられたことからすれば、これらが、一つの、〈超越論的〉対象への問いをめぐる、問題意識とそれに応じた問題提起、問題解決の流れを形成していることは明らかである。



#### 四

「超越論的」というのは、問うことそのものである。認識「批判」というのは、そうした問いを可能にし、解決に導く方法である。「批判」の根本が感性と悟性との認識能力を区別することであり、「超越論的」が、表象の、対象への関係可能性を問うこと、である以上、「超越論的」に問われた、そうした問いにおいて問われている当の対象として、〈超越論的〉対象は、感性と悟性との区別に照応して、二つの意味をもつ。すなわち、一つは、①「感性の相関者」としての側面における物そのものとしての意味であり、もう一つは、②「悟性の相関者」としての側面における、ア・プリアリな総合（現象）とかわるという意味である。〈超越論的〉対象は現象とかわると同時に物そのものでもある。それが物そのものであるのは、それが触発をつうじて現象することにおいて同時に自らを隠すことによつてである。したがつて、②は①を前提する。

超越論的对象は、基本的に①であることによつて、②としての意義をもつ。②は、現象をつうじて、その現象の普遍妥当的限定において、すなわち、統覚の超越論的「一性」が現象においてあらわす普遍妥当的限定が〈超越論的〉対象との現象の「連関」(Verknüpfung)を意味するとして客観的妥当性が〈超越論的〉対象との表象の「連関」において、実現する、そうした表象の統一の関係点である。〈超越論的〉対象が①であるから、そうした関係点たることを求められているのである。

〈超越論的〉対象の①の側面は、表象の、対象への関係可能性への超越論的な問いの設定と相即して規定されたものである。そうした対象を措定することによつて、はじめて、表象の、対象への関係可能性への問いが、超越論的な問いとして設定される。

〈超越論的〉対象の②の側面は、表象の、対象への関係可能性への超越論的な問いが、どのようにして解決されるべきかという視点から規定されたものである。〈超越論的〉対象の側からではなく、それへと超越を試みる主観の側から、〈超越論

的〉対象への超越が何らかの形で可能であるとしたなら、〈超越論的〉対象は、そうした②の側面において規定される必要がある。それが、〈超越論的〉対象の②の側面としての、統覚の超越論的「一性」との「相関」である。

〈超越論的〉対象の①の側面は問題設定を反映し、〈超越論的〉対象の②の側面は問題解決を反映している。「超越論的」と「ア・プリオリな総合」とが、「批判」を前提として、〈超越論的〉対象の①の側面と②の側面とに反映している。そして、そうした〈超越論的〉対象の二義のあいだをどう架橋するか、というのが、ア・プリオリな総合判断の「演繹」問題にほかならない。

「ア・プリオリな総合判断はいかにして可能であるか？」は、一見たんなる問いのように見えるが、「合理的」(A58 || B82)な問いとして、同時に解決の仕方からうちに含み込んだ問いである。すなわち、超越論的批判的問いである。それが問いであることにおいて、そこでア・プリオリな総合判断が判断対象として目指しているのは、〈超越論的〉対象である。しかし、その可能性が問われていることにおいて、〈超越論的〉対象へのこの判断の妥当性は、ある制限性のもとに実現される。同時にまた、それが解答である点において、それは、〈超越論的〉対象への表象の関係可能性がこの判断をつうじてのみ可能であることを示している。そして、そのことにおいて、〈超越論的〉対象への、この判断をつうじてのみ可能な関係仕方の制限性というのが、この判断そのものの制限性であり、この制限性は、現象としての多様が与えられてのみこの判断が可能であり、この判断が現象にたいしてしか妥当的でないとところにあらわされている。

しかし、それなら、〈超越論的〉対象への表象の関係可能性は断念されたのか？——ある意味では断念され、別のある意味では断念されていない。ア・プリオリな総合判断は、それが可能であるということにおいて、〈超越論的〉対象との関係性を前提している。それは、この判断が統覚の「一性」において成立しており、統覚の「一性」が、表象の多様の〈超越論的〉対象との連関を意味しているからである。しかし、そうした普遍妥当的限定をつうじてたんに〈超越論的〉対象は統覚の「一性」との「相関」に引き入れられるのみであって、それ自体の普遍妥当的限定をまさにその意味で受け付けないからである。

別様に表現すれば、〈超越論的〉対象は、ア・プリアリな総合判断の素材を提供することにおいてまさに自らを隠すがゆえに、ア・プリアリな総合判断の主語位置には自らを現わさない。ア・プリアリな総合判断において成立する認識主観と対象との関係そのものをつうじて、われわれは、〈超越論的〉対象との「連関」をたんに確保するのみである。したがって、認識主観と対象とのこの関係そのものうちには、〈超越論的〉対象は入ってこない。

ともあれ、ア・プリアリな総合判断としてカントがじつのところ真に問うているのは、「多様の総合的統一」という、客観性の全文脈を考慮したうえで認識の〈超越論的〉対象とのかかわりである。すなわち、〈超越論的〉対象が①「感性の相関者」として、また、②「悟性の相関者」として、二様の意義において規定されるのは、〈超越論的〉対象とのかかわりにおいて、客観性が「多様の総合的統一」という全文脈において考察されていることの証である。

## 五

ところで、このように、〈超越論的〉対象の二義性は、一方で①「超越論的」問題設定を意味し、他方で、②ア・プリアリな総合によるその解決を意味するのであるが、同時にまた、〈超越論的〉対象の二義性は、①が真理についての対応説の文脈をなし、②が真理についての整合説の文脈をなす、という関係にもある。

②におけるア・プリアリな総合というのは、①における「超越論的」問題設定の枠組みのなかで、それを前提したうえで、それをともに引き受けてそれへの解答として新たに問いなおされた同じ「超越論的」な問いとしての「合理的な」問いである。つまり、それが解答でもあるのは、合理的な問いとして解答を同時に含み込んでいるからである。①における「超越論的」問題設定の枠組みを捨てたところで、②を新たに立て直した、ということではない。

①における対応説を捨てたのではなく、①における対応説を②における整合説によってどのように解決するか、という事

情が、ここにはある。整合説は対応説的真理観の可能な根拠を示すものとしてある。それは、あくまで、対応説的真理観の可能性を示すためのものにすぎない。整合説は対応説を根拠づけ説明するのであって、それに取って代わるのではない。

カントは、ここで、現象としての表象の、それとは区別される対象としての〈超越論的〉対象は、現象しなにかぎりでの物そのものという意味で、表象にとつて「異」なるものであるから、それへの表象の関係可能性を問うたところで、もともと不可能に決まっている、といった態度でこの問いを取り上げているのではない。彼は、あくまでも自らの課題としてそれを把握し、真剣にそれに答えようとしている。すなわち、真理についての対応説などもと成立しようのないものであって、真理は整合説としてしか説明しようのないものなのだ、読者に説教をたれているのではない。カントは、ここで、自身の探究過程を『批判』へと導いた、彼自身の根本的な問いを披瀝している。

真理の整合説的な意味での表象の普遍妥当的限定は、統覚の超越論的「一性」における対象的統一において、たんなる「比較的」普遍性のレベルを超越した、「絶対的」普遍性としての必然性を保証されることで、はじめて、〈超越論的〉対象との「連関」——すなわち、その「客観的実在性」を認められる。

たんなる現象知が、現象知であり、また、現象知でありうるのは、それが、まさに、〈超越論的〉対象を問わないし、問えないがゆえに、である。これにたいし、哲学がこれと区別され、区別されるべきであるとしたなら、それは、哲学が、まさに、現象知のレベルにとどまるのではなく、現象知のレベルを超越するからであり、そのことをつうじて、〈超越論的〉対象を問い、問うことにおいてのみ哲学たりうるからである。

〈超越論的〉対象への問いは、ア・プリオリな総合判断の可能性の根拠づけとしての超越論的演繹によって解答を与えられる。そこでは、現象知の権利「根拠」——〈超越論的〉対象との現象知の「連関」——を示すことによって、同時にその範囲と限界とが示される。これは、現象知が何を明らかにし、そのように明らかにすることによって、同時に、何を明らかにしないかを示すことであり、現象知の意味と意義との確定である。

しかし、哲学者が、しかも哲学者だけが「超越論的」対象を問うといつても、「超越論的」対象がそれによって知られる、ということではない。「超越論的」対象は、依然として未知のままである。というより、むしろ、「超越論的」対象が原理的な意味において未知であることが、明らかになるだけである。なぜなら、統覚の超越論的「一性」という、理論知の極限において、それそのものではなく、たんにそれとのわれわれの知の「連関」のみが、われわれの知の根拠として存することが知られるのみであるからである。

対応説的真理観から整合説的真理観に仮にカントが転換したとするなら、それは、「超越論的」対象への問いという、彼自らがあらたに定礎しなおした哲学の根本問題を自ら放棄したに等しい。

## 六

最後に「演繹」論章と「すべての諸対象を一般にフェノメノンとヌーメノンとに区別する根拠について」<sup>①</sup>の章とにおける「超越論的」対象」概念の削除問題に触れておく。

「超越論的」対象」概念は、「超越論的」問題設定において生まれたものであり、この問いをめぐって『批判』のすべての営みが展開されている以上、削除されえない。すなわち、「超越論的」対象の①の側面は残る。事実、削除されたのは、②の側面についての議論展開を含む部分に限られている。

そうすると、①の側面において「超越論的」対象の基本性格は保持され、「超越論的」対象への問いもまた保持されたうえで、②の側面におけるそれとの「連関」のあり方について何らかの変化が、たんに叙述のうえでか、叙述の範囲を越えてか、あったのであろうか。あるいは、①の側面における「超越論的」対象の基本性格を保持したという、まさにそのことゆえに、②の側面を保持しえない結論に達したのであろうか。

このことは、②の側面が、「連関」の可能性の解決のためにもとと設定されたものであることからして、ア・プリオリな総合ということの、すなわち、その根源である統覚（カテゴリー）の、内容が変化しているのではないか、という問題を孕んでいる。しかも、統覚（カテゴリー）は演繹の中心概念であるから、演繹の内容の変化を、つまるところは『批判』の根本的な変化を、予想する必要があるかないかの問題でもある。

しかし、むしろまさに、すでに解明したごとく、②の側面をつうじて〈超越論的〉対象が、もともとそうした『批判』の根本問題と密接な問題連関をなし、しかも、①の側面が厳然として残っており、原理的な意味での「未知」にとどまっている以上、②の側面が保持しえないという結論に達した、という点については、すくなくとも否定されなければならない。

そうすると、②の側面においても、その基本性格は保持したうえで、たんに叙述の体裁を変えただけのことなのか、あらたに②の側面の可能性に吟味の努力が払われたか、そのどちらかであると考えられる。すなわち、第二版において、〈超越論的〉対象への参照を経ることなく、「全可能的自覚」(A113)で「演繹」の叙述が始められているといっても、それは、統覚一元論の立場を採り、整合説的見地に移行することを表明したのではない、ということである。

たんなる叙述の仕方の変更にすぎないのでないとしたなら、それは、むしろ整合説的文脈の変改によって新たに対応説的文脈への対応をしておいた、ということの意味する。

統覚との「連関」において、統覚同様、〈超越論的〉対象もまた、ア・プリオリな総合の可能性にかかわり、まさに〈超越論的〉対象という名称において、この意味で、「超越論的」と呼ばれた。つまり、〈超越論的〉対象の②の側面は、単に「統覚との相関」や「連関」ということでなく、そうした「相関」や「連関」をつうじてア・プリオリな総合にかかわる、ということである。したがって、〈超越論的〉対象の②の側面に改変が加えられるにしても、改変を加えられた②の側面によって、ア・プリオリな総合にかかわるといって、「超越論的」の意味（「超越論的」ということのあり方そのもの）には変更はない。<sup>12</sup>

②の側面の要点は、その「連関」のあり方そのものではなく、「連関」においてア・プリオリな総合にかかわる、という点で

あり、それこそが、「超越論的」の意味であった。<sup>(13)</sup>

## 注

- (1) ここで、「超越論的対象」ではなく、「超越論的」対象」と表記するのは、超越論的对象における「超越論的」がカントのテキストにおける他の箇所「超越論的」の使用例一般の指示する「超越論的」の意味と異なる性質をもつものであるかのように解釈する余地を除くための措置である。それはまた、「超越論的」と「対象」とを分離して表記することによって、超越論的对象を「対象(もの)」「一般と存在において異なるもの」として理解することを避けるための措置でもある。注(3)、(11)、(13)、参照。
- (2) 以下、『批判』と略記する。この書からの引用・参照箇所の指示は、A(第一版)、B(第二版)に頁数を付して本文のなかで行なう。下記のテキストを使用した。Kant, Immanuel, Kritik der reinen Vernunft, nach der ersten und zweiten Original-Ausgabe neu herausgegeben von Raymund Schmidt, Philosophische Bibliothek, Bd. 37a, Hamburg, Felix Meiner Verlag, 1976.
- (3) 注(1)に記したこととの関連において、いわゆる「物自体」という表現にかんしても、この表現が、「物」一般と区別される、なにか特別の存在者意味するためのものではなく、「物」について、「それ自体そのもの——そのたんなる現象ではなく——」ということを意味するためのものであるにすぎないことを明示するために、「物自体」ではなく、「物そのもの」と表記する。注(1)、(11)、(13)、参照。
- (4) 以下、表現に多少の相違はあるにしても、①として述べるものは、超越論的対象の「感性の相関者」としての側面にかかわるといふ点において一貫している。
- (5) 以下、表現に多少の相違はあるにしても、②として述べるものは、超越論的対象の「悟性の相関者」としての側面にかかわるといふ点において一貫している。
- (6) 注(9)、参照。

〈超越論的〉対象の二義性と「批判」

- (7) 「超越論的」対象「概念の二義の統括的把握の必要性にかんしてはアリソンに学ぶところ多大であった。しかし、この「転換」を主張している点でアリソンは筆者とは見解を異なしている。Allison, Henry E., Kant's Concept of the 'Transcendental Object', in: Kant-Studien, Bd. 59, 1968. 下記でも「転換」が主張されている。宮武昭「自我と物自体——カントの『物自体』への一試論」『倫理学年報』(日本倫理学会)第二十五号、一九七六年。
- (8) Kant, Prolegomena zu einer künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können, Philosophische Bibliothek, Bd. 40, Hamburg, Felix Meiner Verlag, 1976, S. 11.
- (9) Gegenstand と Objekt とは、同じくは特に区別しない。ただ、同一の文中に同時に「対象」と「客観」とを使用する稀な用例(たとえば、B69, A89 = B122)では、Gegenstand と Objekt とを土着のドイツ語(動的)か外来語(静的)かで使い分けられているようにも思える。その意味では、〈超越論的〉対象の①(主観のはたらきとは無関係)を規定する「超越論的感性論」で Objekt を使い、〈超越論的分析論〉の「演繹」論章で②(主観のはたらきとの「相関」においてある)を規定することを Gegenstand を使うというような、何らか意図的な使い分けがあるのかもしれない。
- (10) この間の事情は、一七七二年二月二十一日付けヘルツ宛書簡に詳しい。カッシーラーは「同書簡中の「表象の対象」への問いを〈超越論的〉対象への問いとして解く」「哲学の転回軸」と言っている。Cassirer, Ernst, Kant und das Problem der Metaphysik, Bemerkungen zu Martin Heideggers Kant-Interpretation, in: Kant-Studien, Bd. 36, 1931, S. 1.
- (11) 「対象一般」と解される場合もある Gegenstand überhaupt は、同じくは複数で使われている。本稿は、「対象一般」と解さない立場で執筆している。紙数の関係で論点としては省いているが、もし〈超越論的〉対象と〈対象一般〉とを同一視するとするなら、Gegenstand überhaupt は「対象一般」であってはならないと考える。すなわち、私は、〈超越論的〉対象は、そこにある、たんなる物と考えている。端的に言えば、「観念論論駁」の文脈でのいわゆる哲学の「醜聞」にたいするカントの返答がそれを明示している。以下は両者を「対象一般」として同一視している。Macann, Christopher, The Urgrund and the 'Transcendental Object', in: Akten des 5. Internationalen Kant-Kongresses, Mainz 4-8. April 1981, Teil II, Sektionen I-VII, herausgegeben von Gerhard Funke, Bonn, Bouvier Verlag Herbert Grundmann, 1981. 注(一)。(c)参照。
- (12) その意味では、①の側面に比すれば、②の側面は、もともと、変更の可能性の余地を残すものである。すなわち、統覚概念の



(13)

内容が変化している可能性はある。拙論「超越論的対象と統覚」、『知のアンソロジー』ナカニシヤ出版、一九九六年、参照。

『批判』第二本文執筆以降に執筆された同版序文注における「あらゆる私の表象とは区別された外的な物」(BXLII)というのは〈超越論的〉対象にほかならず、それとの「連関」が強調されていることは、ここで私が示したことに照応している。「観念論論駁」には、一箇所、表象に触れられた箇所があり、そのことから、序文において、この箇所の改訂がなされ、「表象の対象」ということが言われる。そして、そうした改訂を指示したあとで、「表象の対象」を考えに入れるべきであるとしても、何としてもわれわれは表象をつうじて対象に関係するのであれば、直接的には表象しか認識しないのではないか、という疑問に答えていく。「持続的なもの」(BXLII)というのは、直接的には客観的(経験的)対象のことであろうが、こうした論述の歩みにおいて、持続的なもの≡客観的対象がじつはたんなる表象でなく、表象であるがゆえに同時にまた表象としてその対象をもつことが考慮されている。同じ物が同時に、現象として、また物そのものとしても理解されなければならない、というのは、そういうことである。

注(一)、(三)、参照。

(昭和五六年本学文学部卒業・昭和六一年広島大学大学院博士課程修了・山口東京理科大学講師)